

第9章

ワクチンは、うてばうつほどコロナをふやす

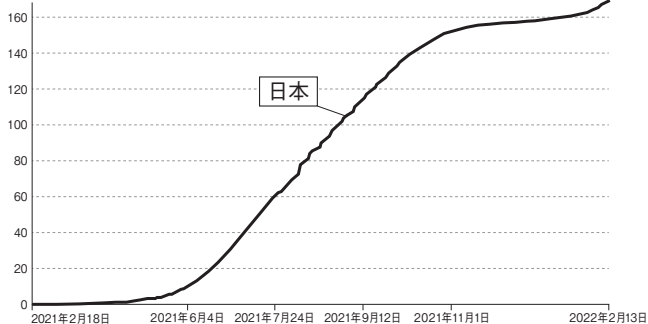
— 予防薬だったはずが、生物兵器・殺人兵器？

日本の「ワクチン接種の増加」

How many vaccine doses were administered in the previous 12 month?

Per 100 people in the population. The value shown for each date is the total number of vaccine doses administered in the 12 months preceding that date. All doses, including boosters, are counted individually.

Our World in Data



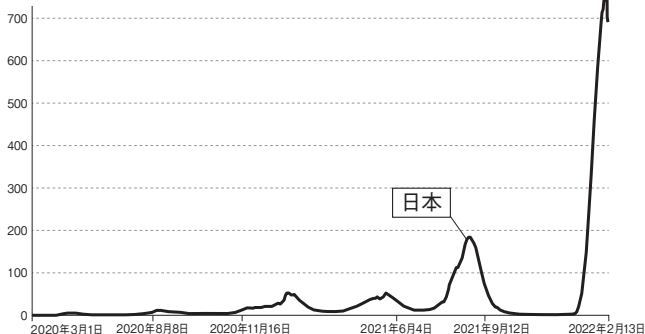
Source: Official data collated by Our World in Data

日本の「感染者数の増加」

Daily new confirmed COVID-19 cases per million people

7-day rolling average. Due to limited testing, the number of confirmed cases is lower than the true number of infections.

Our World in Data



Source: Johns Hopkins University CSSE COVID-19 Data

出典: Our World Data (September 5, 2022)

前章は、他の国ではコロナ騒ぎはほぼ終焉しつつあるのに、なぜ日本だけ感染者拡大が大声で叫ばれ、北海道のような過疎地でもマスク姿が消えないのかを考察しました。

そして、そのひとつの理由が、岸田政権の「安倍国葬」が国民の不興を買い、その世論そらしに利用されているのではないかと述べました。

というのはPCR検査の増幅回数(Ct値)を大きくすれば、陽性者の人数が簡単にいくらでも水増しできるからです。

イギリス公衆衛生局(PHE)の方針でも、「PCR検査の閾値を25以下にすべし」と言っているのです。しかしWHOが当初、世界各国に推奨してCt値は「40」でした。

これでは健康な人でもすべて陽性者すなわち感染者になってしまいます。

最近そのことがバレてしまって、WHO(世界保健機構)でさえ「PCR検査は要注意」と呼びかけ、CDC(アメリカ疾病管理予防センター)にいたっては、その使用を二〇二一年二月三十一日をもって止めると宣言しました。

アメリカでもコロナ騒ぎは、ほぼ終焉を迎え、そのような事態を受けて、先述のように、

ファウチN I A I D所長も二〇二二年いっばいで辞任する意向を表明しました。

しかしランド・ポール上院議員は「嘘をついてコロナ騒ぎを引きおこした疑いがあるから告訴して調べたい。したがってメール記録など証拠物件となるものは厳重に保管すること」を要求しました。

日本の国会議員で誰もこのような疑問・意見を表明する議員がないことは実に悲しむべき現象です。

2

さて、このように今や欧米ではコロナ騒ぎは、ほぼ終わったと考えてよいと思います。

というのは、200頁下段のグラフを見ていただければお分かりのように、アメリカでは日本よりも死者は少なくなっていますし、インドに至ってはかつての日本のように、グラフは底辺を横這いしているからです。

インドでは、『謎解き物語3』で詳述したように、イベルメクチンが大きな効果をあげたからでしょう、「第2のペニシリン」と呼ばれるようになりました。ですからウツタル・ブラデーシユ州のように、州民全員にイベルメクチンを支給しているところも出てきました。

ところが日本では相変わらずコロナ感染者拡大を叫んできました。そのひとつの理由が岸田政権による世論操作ではなかったのかという疑いを、前章で詳述しました。

3

しかし、「感染者拡大」には、もうひとつの理由があるのではないかと、思うようになりました。というのは以前の章でも紹介しましたが、次のような研究が発表されているからです。

御覧のとおり、この研究では、「ワクチンを接種すればするほど免疫力が低下し、コロナから命を救うはずだったワクチンが、感染者を拡大する」と述べているからです。

* Repeated booster jabs may be lethal researcher warns

「ブースター接種の繰り返しは致命的」と研究者は警告する

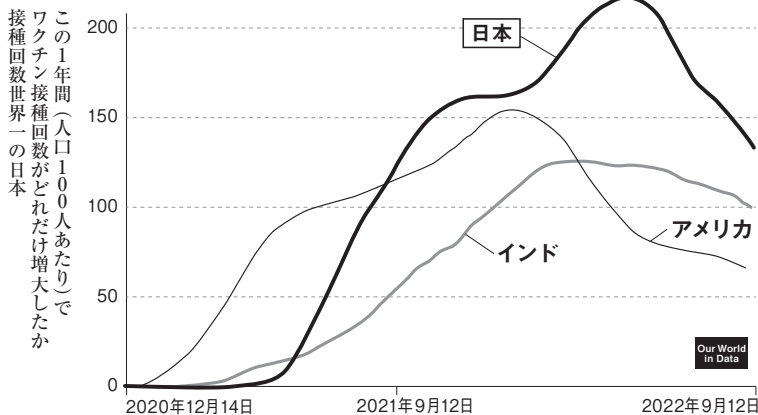
<http://tmmethod.blog.fc2.com/blog-entry-798.html> (『翻訳NEWS』2022/02/24)

* If You Take the COVID Vax, You Can Never Achieve Full Immunity Again - Government Stats Unveil the Horrifying Truth
「COVIDワクチンを接種したら、身体の免疫機能を完全に獲得することは絶対になくなる——政府統計が明かす驚愕の真実」
<http://tmmethod.blog.fc2.com/blog-entry-791.html> (『翻訳NEWS』2022/02/16)

考えてみれば、インドでコロナが猛威をふるっていると言われていた頃の日本では、感

How many COVID-19 vaccine doses were administered in the previous 12 months?

Per 100 people in the population. The value shown for each date is the total number of vaccine doses administered in the 12 months preceding that date. All doses, including boosters, are counted individually



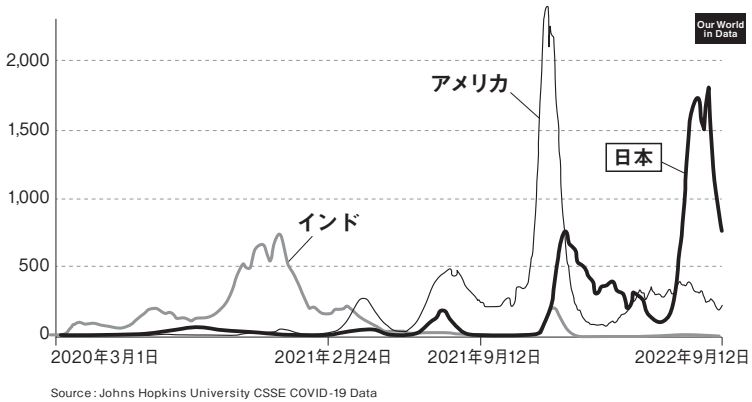
染者もそれほど多くなく、死者数も限られていました。

ところが、WHOや巨大製薬会社(あるいはビル・ゲイツ財団)からのお叱りを受けたからでしょうか、あるときから突然、日本でのワクチン接種者が急増しました。それを示しているのが上のグラフです。

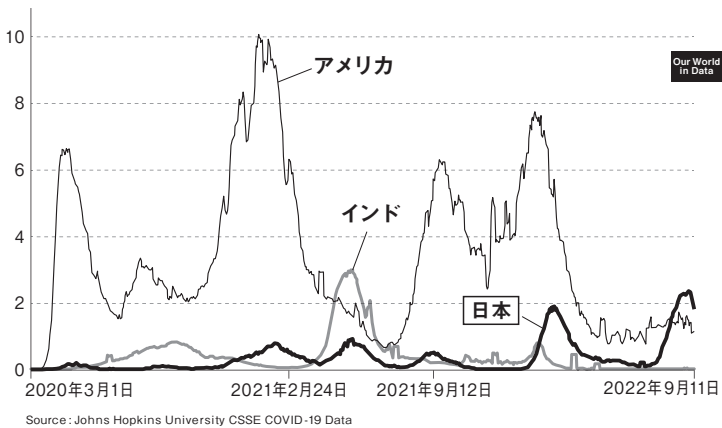
御覧のとおり、日本のワクチン接種者は今や世界最高のレベルです。それに比例して感染者数も増えました。

途中で何カ所か数字の浮き沈みがありますが、おおまかな傾向としては、ワクチン接種と感染者の増減は、ほぼ併行しているとみてよいのではないのでしょうか。次頁上段のグラフはそのことをよく示しています。

コロナ感染者数の毎日の推移 (人口100万人あたり) 日本は感染者数も世界一に
Daily new confirmed COVID-19 cases per million people



この1年間のコロナウイルスによる死者の変化 (100万人あたり) 日々の死亡率
Daily new confirmed COVID-19 deaths per million people



しかし先述のとおり、インドでは州政府の方針でイベルメクチンが普及していますので、感染者が激減し、今は、グラフ上では地面すれすれを横這いしているのです。

ところがインドでも、WHOのコロナ担当の主任科学者がインド出身だからその圧力によるのでしょうか、二〇二〇年一二月から接種者も増えていました。

でも、繰り返すようですが、今やインドでは感染者も死者数もゼロを横這いしているのです。しかし逆に日本では感染者も世界最高なのです。

しかも、ワクチン接種者の人数やワクチン接種の回数が増えていくにつれて、感染者が増えていることに注目してください。

他方、インド弁護士会は、「生命軽視」「ワクチンを強制」を理由に、先述のWHO主任科学者を告訴しました。ここにも、インドがコロナをほぼ制圧した裏の理由がありそうです。

〔謎解き物語2〕146頁

4

これまで私が述べてきたことを傍証する事実があります。それは、知人の佐木さん(仮名)

から送られてきた次の情報です。それには次のように書かれていました。

*日経ビジネス「ワクチン2回の陽性率、半数世代で未接種上回る 厚労省再集計で判明」
<https://business.nikkei.com/atcl/gen/19/00454/053100005/>

ワクチンの化けの皮がはがれました。1週間ほど前にCBC午後5時台の報道でも、紹介されていました。先生の警告啓蒙活動が功を奏していると推察します。

この情報をいただいたとき、「これを必ず次のブログで紹介します」と書いたにもかかわらず、ウクライナ情勢が緊迫していたので、つい延び延びになっていたものでした。さて該当記事を読んでみたら次のように書いてありました。

ワクチン2回の陽性率、半数世代で未接種上回る 厚労省再集計で判明 2022.6.1

新型コロナウイルスに関する厚生労働省の新集計で、ワクチンを未接種の人より2回接種済みの人の方が陽性者になる確率が高くなったとのデータが示された。(中略)

この逆転現象は、二〇二二年五月二日に厚労省の専門家会議「新型コロナウイルス感染症対策アドバイザリー・ボード」に提出された資料で明らかになった。

この会議はほぼ毎週開かれ、同省がワクチン接種歴別に新規陽性者数をとりまとめた資料を提出するのが習わしになってきた。

五月二日の資料によると、四月一〜一七日に40〜49歳、60〜64歳、65〜69歳、70〜79歳の各世代で、ワクチンを2回接種した人10万人当たりの新規陽性者数が、未接種の人10万人当たりの新規陽性者数を上回った。30〜39歳はほぼ同等だった。

四月一八〜二四日には30〜39歳でも、2回接種者の新規陽性者数が未接種者のそれを上回った。その後、直近の五月二五日までに報告された週次データでもほぼ同様の傾向が明らかになっている。

つまり、ワクチンを打てば打つほど感染者が増えているのです。

これは今までに私が『謎解き物語』で主張し続けたことを厚労省が認めたことを意味します。これ以上、巨額の税金をワクチンに注ぎ込む意味がどこにあるのでしょうか。

いずれにしても、このような貴重な情報をいただいた佐木さんに、この場を借りて改めて御礼を申し上げたいと思います。

さてここに、私が今まで述べてきたことを傍証する、もうひとつの事実があります。それを示すのが次の記事です。

* Vaccine Hesitancy in Haiti Has Led to the Lowest COVID-19 Cases and Death Rates in the Western Hemisphere
「ワクチン接種をためらったおかげで、ハイチはCovid-19の症例数や死者数が、西半球で最も少ない数で済んだ」
<http://tmnmethodblog.fc2.com/blog-entry-1047.html>【翻訳NEWS】2022/09/27

この記事は、ハイチでは実験的ワクチンにたいする警戒感が強く、その接種がほとんど進まなかったのですが、その結果、コロナの感染者数も死者数も、西半球では最も少なかった、という報告でした。

今までハイチは人道支援という名目で欧米から医薬品その他でさまざまな支援を受けてきましたが、逆に病気を蔓延させることになったという苦い経験があるからです。

まして選挙で大統領に選ばれた神父ジャン＝ベルラン・アリスティドが、裏でアメリカが画策したクーデターでアフリカに追放されてから、ハイチの貧困は増すばかりでしたから、西側への不信は消えることはありませんでした。

アフリカに追放されたアリスティド大統領が、ハイチに帰国して再び大統領選挙に立候補



元ハイチ大統領ジャン＝ベルラン・アリスティド

補しようとしても、そのたびにアメリカの裏からの妨害で立候補できなかったことも、アメリカを初めとする欧米への不信感を強めていました。

このような傾向はアフリカでも同じで、欧米による植民地支配で、アフリカ諸国の多くは貧困に追いやられたただけでなく、欧米の開発した新薬の実験台として使われてきたとい

う苦い経験があります。

ですからアフリカでもワクチン接種がほとんど進まず、WHOや巨大製薬会社、ビル・ゲイツ財団をイライラさせました。ところが、不思議なことにアフリカでは、欧米ほどの感染者や死者が出なかったのです。

これはイベルメクチンがアフリカの風土病を駆逐するのに役立つてきていたからで、アフリカでは日頃からイベルメクチンを飲むことが一般的になっていて、これが効を奏したのではないかと推測されています。

東京医師会の会長が「アフリカから学べ」と言って、イベル

メクチンを日本でも使うよう呼びかけたのに、今でもそれが実現せず、相変わらずワクチン推進に大量の税金を注ぎ込んでいるのと対称的です。（それどころか、この東京医師会の会長は医学会からも大手メディアからも袋だたきに遇あいました。『謎解き物語3』163頁）

6

感染者拡大の要因を調べ直して、もうひとつ気づいた恐ろしい事実があります。それは、ワクチンがコロナウイルスを撃退するどころか「変異種」を増やしている可能性があるということです。

このことをいち早く指摘していたのが、やはりノーベル生理学・医学賞（二〇〇八）の受賞者リュック・モンタニエ博士でした。これについても実は『謎解き物語3』（281、282頁）で紹介しているのですが、念のため、その一部を次に再録します。

しかしワクチンの危険性については多くの心ある学者・研究者は、以前から強い警告を発してきました。その典型例がフランスのウイルス学者であり、ノーベル賞受賞者のリュック・モンタニエ博士（Luc Montagnier）です。



ワクチンが「変異株」をつくりだすと主張するモンタニエ博士（ノーベル医学賞2008）

インタビュ番組で博士は「変異株をつくりだしているのはワクチンだ」と言っているからです。

* Bombshell: Nobel Prize Winner Reveals - COVID Vaccine Is 'Creating Variants'

「爆弾発言：ノーベル賞受賞者が暴露——コロナワクチンが「変異株」をつくりだしている」

<http://unmethod.blog.fc2.com/blog-entry-708.html>（翻訳NEWS】2021/11/13）

このモンタニエ博士を「陰謀論者」と嘲笑し、ユーチューブなどから博士の発言を削除させようとする強い圧力があるのですが、真理を決めるのは権力ではなく、実験・実証による論争のみでしょう。いつから私たちはガリレオの時代に戻ってしまったのでしょうか。

モンタニエ博士は、このインタビューで次のように言っています。

「これがウイルスによって生み出される抗体で、それが感染力を強くするのです。これがいわゆるADE『抗体依存性感染増強』と呼ばれる現象なのです。つまり、ある種のウイルスに感染しやすくなるような現象のことです」

詳しくは、『謎解き物語3』（282頁）を読んでいただきたいの

ですが、博士は「多くの人々がこのことを理解しています。疫学者たちも分かっています」「しかし科学者たちは沈黙しています」と言っているのです。

これが巨大製薬会社から研究資金をもらっている医学会の現状なのです。何度も言いますが、感染者拡大や被害者の増大は、コロナ政策の結果であって、コロナウイルスのせいではないのです。

そもそも「新型コロナウイルスの致死率は0.1%未満で、インフルエンザと変わらない」という共著論文を発表していたNIAID（国立アレルギー・感染症研究所）所長ファウチ博士が、突如、意見を変えて「新型コロナウイルスはインフルの10倍の致死率」と言い始めたのは、WHOがパンデミック宣言をした（二〇二二年三月二日）直後でした（『謎解き物語1』65頁）。

7

このように今回のコロナウイルスは持病もちの高齢者以外にとっては危険なものではありませんでした。このことも『謎解き物語1』3』で繰り返し指摘したとおりです。

しかしワクチンはそうではありません。その危険性は、つい最近、暴露されたファイザー社の秘密報告で、白日の下にさらされることになりました。

つまり遺伝子組み換えワクチンを打てば打つほど感染者が増えているだけでなく、ファイザー社の秘密報告では、ワクチンによって副反応が続出し多くの死者まで出ているのです。それを示すのが次の記事でした。これは情報公開法を通じて明らかになったものです。

* Bombshell Document Dump on Pfizer Vaccine Data

「ファイザー社が機密文書として保有していたワクチンに関する大量の爆弾的文書」
<http://tmmethod.blog.fc2.com/blog-entry-941.html> (『翻訳NEWS』2022/06/13)

これは、この間^{かん}ずっと公開請求をしていたにもかかわらず、FDA(アメリカ食品医薬品局)が裁判所を使って55年も隠し続けようと画策していたものが、世論に抗しきれず、やっとの目を見ることになったものです。

この膨大な文書のすべてを紹介することは、ここでは無理なので、この記事の要点だけを以下に記すことにします。

注意すべきことは、これはファイザー社自身のデータだということだ。

情報公開法(FORA)の手続きの一環として公開されたこのファイザー機密報告書は、二〇二〇年二月のワクチンプロジェクト開始から二〇二二年二月末にファイザーが記録した

死亡例と有害事象に関するデータである。

つまり非常に短い期間(せいぜい2カ月半)、すなわち二〇二一年二月二八日までの累計で、4万2086人から事象報告があり、その数を合計すると15万8893件になった。

この大部分(3万4762人)は、米国(1万3739人)、英国(1万3404人)、イタリア(2578人)、ドイツ(1913人)、フランス(1506人)、ポルトガル(866人)およびスペイン(756人)からの報告であり、残りの7324人は他の56カ国です。

データ全体の器官別大分類(SOC)は次のとおり。すなわち

- 一般障害および投与部位の異常(5万1335件)、
- 神経系障害(2万5957件)、
- 筋骨格および結合組織障害(1万7283件)、
- 消化器障害(1万4096件)、
- 皮膚および皮下組織障害(8476件)、
- 呼吸器、胸部および縦隔障害(8848件)、
- 感染症および感染蔓延(4610件)、
- 損傷、中毒および処置合併症(5590件)、
- 調査の必要あり(3693件)

二〇二〇年一二月から、たった2カ月半の報告で、これだけ大量の被害が出ているのです。だとすれば、二〇二二年九月現在、いったいどれだけの被害者が累積していることでしょうか。しかし、その全体像は闇の中に隠されたままです。

日本の厚生労働省も、ワクチンによる被害はほとんど認めず、かつイベルメクチンによる正式治療は認めない方針で現在に至っています。私が『謎解き物語2』で次のように指摘したとおりです。

■ 原発報道のばあい、「安全です。心配しないでください」

■ コロナ報道のばあい、「とても危険です。マスクは絶対に必要です」

■ ワクチン報道のばあい、「安全です。だから安心して接種を受けてください」

しかし世界中で奇跡的な治療実績をあげているのに

■ イベルメクチン報道のばあい、「安全は保証できません。だから使用は控えてください」

ご覧のとおり、イベルメクチンは日本人が開発しノーベル生理学・医学賞まで受賞した医薬品なのに、これが日本政府の対応なのです。これではコロナ騒ぎの中で死傷者は増え

るばかりでしょう。同じことを繰り返すようですが、私たちは何という無慈悲な政府を押しただいであることでしょうか。

9

最近これに関連して面白い体験をしたので、それを紹介して本巻の結びにしたいと思います。

というのは、私が主宰する研究所の「宿泊セミナー」に行くため、中部国際空港で早朝の鹿児島行き飛行機に乗らねばならず、タクシーを頼んだのですが、そのとき、その運転手が私たち夫婦に次のように話しかけてきたのに驚かされたからです。

自公政権は相変わらずマスクやワクチンばかりを叫んで、おかげで柳ヶ瀬を初めとする岐阜の繁華街は閑古鳥が鳴いている。

これでどうして景気回復ができるのか。巨額の税金を使ってWHO・巨大製薬会社から買われたワクチンを消化するのに忙しいからだろう。

遺伝子組み換えワクチンは低温保存が難しく、しかも有効期限があるからね。

病院の勤務医に遺伝子組み換えワクチンの危険性を説明しても、なかなか素直に受け止めてもらえないのに、一介のタクシー運転手が、今回の事態をみごとに言い当ててくれているのです。

私が日頃言っていたことを逆に向こうから切り出してくれたことに驚くと同時に、庶民がもっている遅^{たく}ましさ、深い知恵を学んだような気がしました。日本もまだまだ捨てたものではないと思わされた次第です。

〈追記〉

最近、タクシーの運転手が事故で亡くなることが相継いでいます。次の報道もその一例です。私はワクチン死を疑っていますか、残念ながら証拠がありません。

* 死亡のタクシー運転手、くも膜下出血か 母親「持病なかった」
<https://www.asahi.com/articles/ASP9D5QJZP9DUTTL00N.html>

* 5人死傷のタクシー事故、運転手が死亡 発進後に急加速か
https://www.asahi.com/articles/ASP9D3J8XP9DUTTL006.html?ref=pc_extlink

アメリカではワクチンをうった民間機のパイロットが飛行中に意識不明になったり、フットボールの有名選手が試合中に倒れたり死亡する事故が相継ぎ、話題になりました。その多くが心臓発作でした。

調べてみると、ワクチンを複数回うっているひとが、ほとんどでした。

なお私を新岐阜駅まで送ってくれた運転手は、口ぶりからするとワクチンをうっていないと思われるが、多くのタクシー運転手は「職域接種」でワクチンを拒否できない環境におかれています。その人たちの無事を祈るのみです。

〈本章のキーワード〉

アンソニー・ファウチ（NIAID所長）

ランド・ポール（上院議員、共和党）

リュック・モンタニエ博士（ノーベル生理学・医学賞受賞者、二〇〇八年）

ADE 「抗体依存性感染増強」

PCR検査の増幅回数（Ct値）

FDA (アメリカ食品医薬品局)

FOIA (情報公開法)

NIAID (アメリカ国立アレルギー・感染症研究所)

Ct値 (PCR増幅回数の「閾値」いきち)

PHE (イギリス公衆衛生局) が推奨するPCR閾値は「25」

著者紹介

寺島隆吉 (てらしま・たかよし)

1944年生まれ。思想家。東京大学教養学部教養学科(科学史・科学哲学)卒業。元、岐阜大学教育学部教授。現在、国際教育総合文化研究所所長。

岐阜大学在職中に、コロンビア大学、カリフォルニア大学バークリー校、サザンカリフォルニア大学客員研究員、ノースカロライナ州立A&T大学(グリーンズボロ)およびカリフォルニア州立大学ハイワード校の日本語講師などを歴任。

訳書：『衝突を超えて—9・11後の世界秩序』(日本経済評論社)、『チョムスキー、アメリカンドリーム^のの終わり—富と権力を集中させる10の原理』(Discover21)、『チョムスキーの教育論』『チョムスキー 21世紀の帝国アメリカを語る』『肉声でつづる民衆のアメリカ史』上下巻(以上、明石書店)、共訳書：ロートブラッド他(編)『核兵器のない世界』(かもがわ出版)など多数。

著書：『コロナとウクライナをむすぶ黒い太縄 1—まだどれだけ殺すつもりか イベルメクチン^の圧殺とファシズム化するアメリカ』『同2—「プーチンの大罪」?そして未来はEUの崩壊かゼレンスキーの降伏か』『同3—闘うイベルメクチンの飲み方・使い方。コロナもワクチンも、国防総省が開発した生物兵器』『同4—殺ったのは誰?なぜ?安倍暗殺からブリゴジンの死まで』『ウクライナ問題の正体 1—アメリカの情報戦に打ち克つために』『同2—ゼレンスキーの闇を撃つ』『同3—8年後にやっと叶えられたドンバス住民の願い』『コロナ騒ぎ謎解き物語 1—コロナウイルスよりもコロナ政策で殺される』『同2—[メディア批判]赤旗から朝日まで』『同3—ワクチンで死ぬかイベルメクチンで生きるか』『レポートの作文技術』(以上、あすなろ社)、『英語教育原論』『英語教育が亡びるとき』『英語で大学が亡びるとき』(以上、明石書店)など多数。

論文：「ケプラーにおける調和論の諸問題」(日本科学史学会『物理学史研究』第4巻第3・4合併号 17-32頁、1969年)など多数。

コロナとウクライナをむすぶ黒い太縄 1 まだどれだけ殺すつもりか イベルメクチン圧殺とファシズム化するアメリカ

2023年11月26日第1刷発行

著者：寺島隆吉

発行者：紫田陽子

発行所：有限会社あすなろ社

〒502-0071 岐阜県岐阜市長良2794-1

Tel & Fax 058-297-1509

装画：青山桂己

装幀：有限会社ロフロデザイン

印刷所：株式会社大洋社